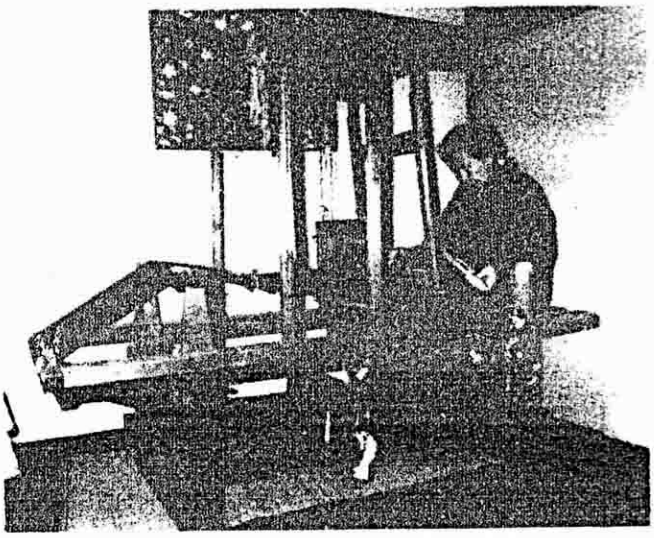
郷土誌だより
# いまむら

No 13
編集
今村誌編集委員会
発行
今村誌刊行会
瀬戸市平町3−142
電話（84）0840
コミュニティセンター内

## はたおりと女



田舎では、どこの家でも蚕を飼っていた。掃立てから繭になるまでの作業は、苦労も多く多忙であったが、楽しみなことでもあった。取れた繭は、その殆んどを町の製糸工場に売り、僅かに残ったくず繭を、母は大きな鍋で煮て、うつぎの葉で糸口を引き出し数本づつを一緒に取り出し、一本の糸にして、「ブィーン」「ブィーン」と鈍い音をたて、糸車を廻して紡いだ。

その糸で、はたおりを教えてくれた。「わく」に巻き、かせくりにかけ、管に巻き、「はたご」にかけるまでには、数段階の作業をへてやっと機織りが始まり、一反織るに幾日もかけて、丹念に織り続けた。そうして織り上げた白生地は、着物に羽織にと、好みの柄に染めて、みんな私の嫁入支度となった。

嫁いでからは、はたおることもないまま、忘れかけた頃食料も衣料も統制になり、衣料は切符制になった。育ち盛りの子には着せねばならず、思いついたのが、昔取った杵づかとばかり、はたを織ろうと、名古屋の「やみ市」で、わけの分らぬ糸を買ってきて娘時代の、おぼろげな記憶を頼りに、はたを織った。それは、布とは名ばかりのガサガサの織物だったが、着物に洋服にと仕立てて着せ、苦しい時代をのりこえた。

今でも、效範町の武藤くわさん（明治三六年生）が、趣味としてウールの糸で、時折、織っておられるようです。

平町の横山志ようさん（明治二九年生）は、「古いことで大方忘れてしまったが、昔は、畑で綿を作り、それを紡いで織り上げるまで、全部家でしたもんじゃ、木綿を紡ぐことは難しいので、上手な人でなきゃやれなんだが、織ることは、誰でも織ったもんじゃ、布団も、着物も、仕事着も、みんな木綿の、うち織じゃった。表も裏も、うち織で丈夫なこたぁ　丈夫じゃったが、重い布団や着物じゃった。今は、エエもんが出来て、エエ世の中じゃ、布団も軽うてぬくとうて、長生きはするもんじゃ」と、とつとつと話してくださった。

（南山町　大竹江起子）

## 編集室から

今回は皆様からおよせ頂いた原稿・手記を中心にまとめました。

こうしたご寄稿文は本の中にも全文、又は要約を掲載させて頂きますので、他の刊行物から引用された部分についてはその出典を明記して下さい。又、ご寄稿文の取捨選択は当方にご一任下さい。

原稿用紙は専用のものを用意致しておりますのでお申付け下さればさしあげますが、必ずしも原稿用紙とは限りませんので、どんな紙切れにでも結構ですからお書き下さい当方で清書して使用します。

# くらしと井戸

昔は、一戸に一つの井戸が戸外に、大方は東南の方角にあった。

**①井戸ばた**　井戸の辺りを、こう呼んでいた。雨水などが入らぬよう工夫され、水がめ流し等もあり、せんだくもした。せんだくは、「たらい」と、せんだく板を使った。一度使った水は、ためておいて肥しや、道ばたの家では打水もした。こんな状態だったから、蚊が多かった。

共同井戸では、井戸ばたで水汲みやせんだくしながら、世間ばなしを楽しむ場所でもあった。そこから、井戸端会議と言うことばが生れた。

**②水汲み**　井戸から水を汲むには、長い間「つるべ」を用いるのが普通であったが、車井戸もあった。やがて、ポンプが普及してきたが、汲んだ水は「ておけ」で、家の中にある。水がめに運んで、「ひしゃく」で、汲んで使った。ふろ水を汲みこむことは、たいへんであったが、押し上げポンプや動力ポンプが使えるようになって、便利になった。

井戸は、神聖なものとして井戸神と、あがめた。正月には、鏡もちを供えたり、「若水」を汲むという行事もあった。

**③井戸さらえ**　水は底から出るものが多かったので、水位がさがった時、数年に一度、水を、すっかり汲みあげて、井戸底の掃除をやり、「人を汲み出して、井戸ざらえ、しまい」ということであった。この後、お神酒と塩をまいて清め、一夜明けてから使った。

**④掘抜井戸**　瀬戸川の吉田橋辺りから下流の地域には、自噴水の掘抜井戸があった。八王子神社の「みたらし」用の掘抜井戸について、「発起人伊藤徳右エ門、井戸掘り新居南原山、三浦義太郎、大正五年一〇月一七日午後五時、水が出た」という区長兼氏子総代青山嘉左エ門の記録がある。

**⑤地下水**　井戸水は、使えば使うほど、いい水が出た。水温は、一年じゅう変化が少ないので、夏は冷たく、冬は暖かい水であった。

都市化が進んで、農地や山林、昔は二〇位あった溜池も開発されたから、地下水の水位が低下したので、井戸水は、だんだん枯れてしまった。今は、上水道のおかげで、蛇口をひねりさえすれば、水が出る生活になった。

（平町　伊藤初男）

# 小学校時代の思い出

## その一

校長の伊藤浜吉先生から、ローマ字を教わったこと。

たしか四年生の時だったと思う。大変珍しくて、アルファベットでいろいろのことを書いた。ローマ字でピン、ペンと書けばそれがそのまま英語であると聞いて、英語も習ったと有頂天になったことを思い出す。

浜吉先生のローマ字はいわゆる「日本式ローマ字」であった。数年後、私は八高の生徒になって、椎尾教授に教わるようになった。椎尾教授は大の日本式ローマ字論者であったので、浜吉先生のことを話したら、是非会いたいと言われたので、私は浜吉先生の家に案内して、両先生の歓談に聞きほれたことがあった。

## その二

五、六年生の頃、名前は忘れてしまったが追分あたりから来ていた女の子が、弟の赤ん坊をおんぶして通学していた。時には、もう一人少し年上の子も連れてきた。授業が始まると、おんぶしたまま、自分の席について年上の弟をわきにおいて勉強していた。上の弟はさすが授業中は静かにしていたが背中の赤ん坊は容赦なく泣き出すので教室から外に出て、赤ん坊をあやしながら、窓ごしに教室内をのぞきこんで先生の話にきき入っていた姿が今でも眼底に焼きついてはなれない。

## その三

これは私の身内のことで恐縮だが校舎の中央玄関を入った所に、銃剣をかまえた一人の兵隊の姿を大きく引伸した写真が掲げてあった。この兵隊は私の父方の伯父、横山亮太郎で日露戦争の時、遼陽の合戦（首山堡）で戦死した。

同じ村で数名の戦死者があったにもかかわらず、伯父のみが特に称揚されて学校に写真が掲げられるようになったのは、伯父が戦死した後、中隊長から戦死の有様をほめたたえる手紙があったので、村中の評判になったからで、母方の伯父、矢野小三郎も同じ首山堡で戦死したが、中隊がちがっていた。

（名古屋市緑区・横山亮一）

**編集部註**　明治六年五月、慶昌院を仮校舎として開校した教範学校はその後、今村二三四八番地に校舎を新築、校名も今村学校（明九）八白村尋常小学校（明二三）旭村第一尋常小学校（明三九）と改名を重ね、明治四三年、大字今一五八六番地（現平町一）へ移転して旭村第二尋常小学校となり大正一五年瀬戸教範尋常小学校と、開創当時の「教範」を名乗り昭和五年、現在地へ新築移転。横山さんは大正六年の入学生でした。

## くすりうり

毎年二回は、決って富山の薬売りがやってきた。これは江戸時代から続いてきたことらしい。常備薬として、大きな紙袋や、薬箱に入れて、家々に預り、次に廻ってきた時に、使った分のお金を受取り新しい薬と入れかえていく商法だった。

薬屋は、着物の裾を尻ばしおりし、羽織を着て、パッチに脚絆、紺足袋に、わらじばきという、いでたちで、荷物を包んだ紺色の大ぶろしきを背負って、歩いてきた。

半年振りのあいさつを交わしながら、上りがまちに、荷物をおろし、風呂敷を広げた。中には段々に、はめこむことのできる五段ぐらいの柳行李が入っていて、その一つ一つに薬が分類され、見事に整頓されていた。

いろいろ世間話しをしながら、二つ折りにした厚紙をひろげ、その上で、手際よく使い残りと、新らしい薬の入れかえをした。それが終ると、矢立を取り出して数量を書きこんだり、小さいそろばんで計算したりするのが、ものめずらしく、そばに座って見ていたが、何んといっても楽しみは、おみやげの角ふうせんや、食い合せ注意等の絵をもらうことだった。

その頃、金モールで飾った黒い軍服まがいの服装で、手風琴を鳴らし、賑やかに、「オイチニの薬売り」もきた。珍らしさに、子どもたちが、「オイチニの薬は、ようきくくすり、オイチニ、オイチニ」と、はやしながら歩調をとって、ついてまわったこともあった。

一時は、何人かの薬売りが出入りして、断るのに困る程だったが、時代と共に影がうすれ、今では、父祖の頃からなじみの薬屋が、ただ一人、にこやかに廻ってこられるが、大風呂敷は、立派な革のカバンに、着物は洋服に、徒歩から自転車、バイクに、わらじは地下足袋、靴と変わってきた。

（平町　伊藤一江）

## 八月十五日をむかえて

昭和二〇年八月十五日、それは悪夢のような錯覚におそわれる。いや、夢ではない、この足この体で幼い三人の子供を抱え、引きずるようにして北鮮三十里の山道を歩き、ひたすら故郷恋しさに三十八度線を突破して帰ってきたではないか。突然、一週間程疎開するようにということで、着のみ着のまま防空服装のまま新京を出発、無蓋の貨物列車にすし詰めにされて運ばれた。疎開先は朝鮮の山奥、着いた翌日終戦、外地で敗戦のみじめさ、女の身で使役、重労働。忘れもしない零下二十度、三十度の一月の厳寒の中に結氷した博川（ハクセン）という川に三人一組で一台のソリを受持ち中学校建設用の砂利を運んだ時の辛さ、シャブシャブの高粱（コウリャン）かゆの空き腹で、カチカチに凍りついた砂利をツルハシで砕き、ソリにのせ朝の九時から夕方の五時近くまで、何度も往復した。

日本人避難民は終戦の声をきくと同時に今までいた日本人小学校を追い出され、煤だらけの倉庫に寝たり、土間にむしろを敷いて米のカマスを開いて布団代りにして抱き合って寝た。苦しかった。哀しかった。矢もたてもたまらず故郷が恋しかった。いよいよ内地へ帰れるという内々の報があり飛び立つ思いで出発したものの、途中で団の中から娘を三人、人質にすることを交換条件としてやっと通行を許されるという哀しい出来ごともあった。

不案内の山道を三十里も六才の長女を頭に四才、二才の三人の子供を連れての道中、今思うとよくも歩いてくれたとしみじみ思う。途中、狼に食べられてもいいからおいていってと座りこんで歩こうともしなかった四才の慶之助、お尻を引っぱたいて叱り、なだめすかして引きずって歩いた。折角三十八度線まで行って、もし日本人の通行は禁止などと追い返されたらどうしようかとみんな不安だったが気持よく通過させてくれた時の嬉しかったこと、皆抱き合って泣いた。

ああこれでやっと生まれ故郷日本へ帰れるのだ。そう思った瞬間、張りつめていた気持が一度にゆるんで、急に足の力も抜け、くたくたと座ってしまい、とうとうその夜は野宿をしてしまった。今でも夜目にもはっきりと見えた三十八度線の白さは私の脳裡にしっかりと焼き付いている。

乗船の際、釜山の港で、船に掲げられた日の丸を一年ぶりに見たあの感激は終生忘れることはできない。

やっと故郷に辿りついて母の顔を見た瞬間、堰をきったように大声をあげて泣いてしまった。

（元・松ケ丘町・現・名古屋市緑区在住　神間八重子）

# みんなで作ろう 今村地区誌

郷土誌は、専門家か、特別な人々に、まかせてつくることが多い。がこの地域では、みんなで作ろうじゃないかと機関誌「郷土誌だより」を、一二号まで出して、その後、ひとやすみになっている。

「本は何時できる」のささやきを耳にすると、「まかせた」の心持がうかがわれるが、「今村」という地名は、松原広長公の命名で、その松原公が、一四八二年安戸坂の戦いに敗れ、亡くなられてから来年は五〇〇年になるから、来年こそ、出版の年としたい。

こうなると、急がねばならぬ、今年の夏休みがやまになる。

あなたも、本づくりの世話人になって、さらに仲間を増やして、文章だけでなく、写真、絵、地図等書いて、「いい本ができた」「これ、この通り」と、自分の証しが見せられるよう、永久にのこる活動に、参加しよう。

連絡は、最寄りの左記へ、

一、效範小学校、長根小学校
東山小学校の各教頭先生
二、コミュニティセンター気付
編集資料室

## あなたも「筆者」に

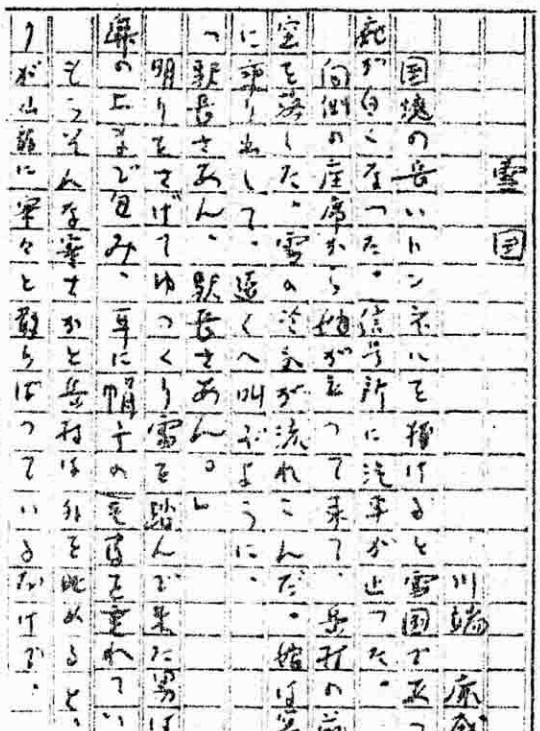
今号にご紹介したような話は、今、書きとめ、活字にしておかなければ後世に伝える機会は永久に失われるかもしれません。

他の人では書きそうもないような話とか、ありふれたことでも、これはぜひ…と思うことなど、上手も下手もありません（当方でちゃんとした文章にします）普段話すような調子で書いて下さい。

お年寄りやご病人などから聞いて書いた話には、末尾にカッコで（誰々さん述、誰々記）と、話して下さった人の名前も入れて下さい。

他地区から転入された人でも、初めてこの土地に来たときの様子を書いておくと、それが二十年、三十年後には貴重な記録となりましょう。現代の十年は中世の何百年にも匹敵する変りようです。

さあ、あなたも「筆者」になって本を作りましょう！




## 原稿の書き方

原稿は、くずし字を使わず楷書ではっきりと書いて下さい。書き損じたり字を間違えたりしたとき、すぐ消して書き直せるように、鉛筆書きをおすすめします。

さて、原稿の書き方には、一定のルールがありますのでその基本的なことを少し説明してみましょう。（図を参照しながらお読み下さい）

1 原稿は一マスに一字づつ、きちんと書きます。マスからマスへ字がまたがることのないように気をつけて下さい。

2 。や、や「」や（）なども一字とかぞえて、一マスに一つ書きます。（図の「駅長さあん」のところ。「も、駅長さん、の、も一マスに一つ書いてあります）

3 原稿の書き始めは、最初の一行に題名、二行目に氏名、そして次の行から本文に入りますが、文章の書きはじめは一番最初の一マスをあけて、二マス目から書き出します。（図の、国境の長いトンネルという所、国の字の上が一マスあいています）

そして、文章が一区切りして行を改めるときも、行を改めた最初の一字を下げて書き出します。図の本文三行目、向側の…の所、向の上が一マスあけてあります。このように、行を改める場合、必ず頭の一桝をあけて下さい。

4 原稿が二枚以上になったときはきちんと重ねて右肩をとじて下さい。ホチキスでもよいし、コヨリなど使う人もいますし、ゼムクリップでとめる人、虫ピンでとめる人とさまざまですが、とじるのは必ず右端です。

5 字が正しいか間違っていないか、字引で確かめるのがふつうですが、自信がないときはカナ書きにして下さい。字が違っていたために意味が反対のことを示すようなとんだミスを犯すことがあります。

（広長公物語は紙面の都合上、休ませて頂きました）